

技術士包装物流会 月例研究会 講演要旨

日時	平成 31 年 07 月 8 日 (月) ----- 18:00~20:00
場所	日本マテリアルフロンティア研究センター 2F 会議室 〒171-0022 東京都豊島区南池袋 パレス南池袋 2 階
演題	2030 年包装の未来予測シリーズ (循環型社会、包装技術)
講師	日本包装専士会未来包装研究委員 大和製罐株式会社 技術開発センター 技術士 (経営工学部門) 橋本香奈氏 出光ユニテック株式会社 商品開発センター 副所長 北島誠之氏
内容	

1. 概要

日本包装専士会にて未来包装研究委員会が 3 年前に立ち上げられ、2030 年の包装の未来予測活動を行った。TOKYO PACK 2018 にて、①**生活者**、②**食品ロス**、③**循環型社会**、④**包装技術**の 4 分野に分け、それぞれの視点からみた予測内容を発表した。5 月月例研究会の前編①②に引き続き、今回の 7 月研究会では、後編③④について講演した。

予測と提案は次の手順を踏んだ。「社会的課題」「新技術 (包装技術・包装の役割)」をインプット情報とした。情報をクロスに評価し、「2030 年のあるべき姿」「現状とのギャップ」を見える化した。「未来に進むべき方向」をアウトプットとして提案・発表した。

2. 循環型社会の視点からみた包装の未来 (橋本氏)

プラスチックごみの海洋投棄が問題となり、世界中でプラスチック製容器包装などの使用規制の動きが進み、日本ではプラスチック資源循環戦略が策定された。本来はプラスチックに限らずどの素材も流出させないことが大事である。使い終えた容器包装を、徹底的に利用する資源循環の仕組みを構築し、事業の収益性や持続性まで含めて考える。残されたこの課題は難題であるが、果敢にチャレンジする企業も登場し、パッケージからパッケージへのリサイクル技術の開発、技術を支える社会システムの構築が期待される。

最後に講師が趣味の水中写真撮影で撮影した海底の様子が紹介された。自然のものを住みかにするハゼが、年々海底に堆積するパッケージを住みかにするようになったことを伝えた。

3. 包装技術全般としての包装の未来 (北島氏)

包装技術全般という広い分野の中から未来包装研究委員会として注目した機能性包材として「鮮度保持アクティブ包材」、「開封・取出し易さ」、「医薬包装」、コンバーティングとして「印刷」「インキ・接着剤」「ラミネート」「製袋」をキーワードに現在の状況を踏まえたうえで社会的な課題である環境への配慮、小人化・自動化などへの対応やそれに伴う今後の技術展望などを中心に発表した。

4. 4 分野通してのメッセージ

包装近未来のメガトレンドとなっている情報の先読み・先取りをし、常に未来志向で、すでにある未来を見つけに行く。その姿勢が今のわたしたちに求められるスタンスである。

講演を聴いた方々からのご意見をいただき、皆さまと議論をしながら、講演を聴いていただいた方との自由な意見交換をしながら、望ましい包装の未来の探求を続けていきたい。

以上
文責 北島誠之・橋本香奈